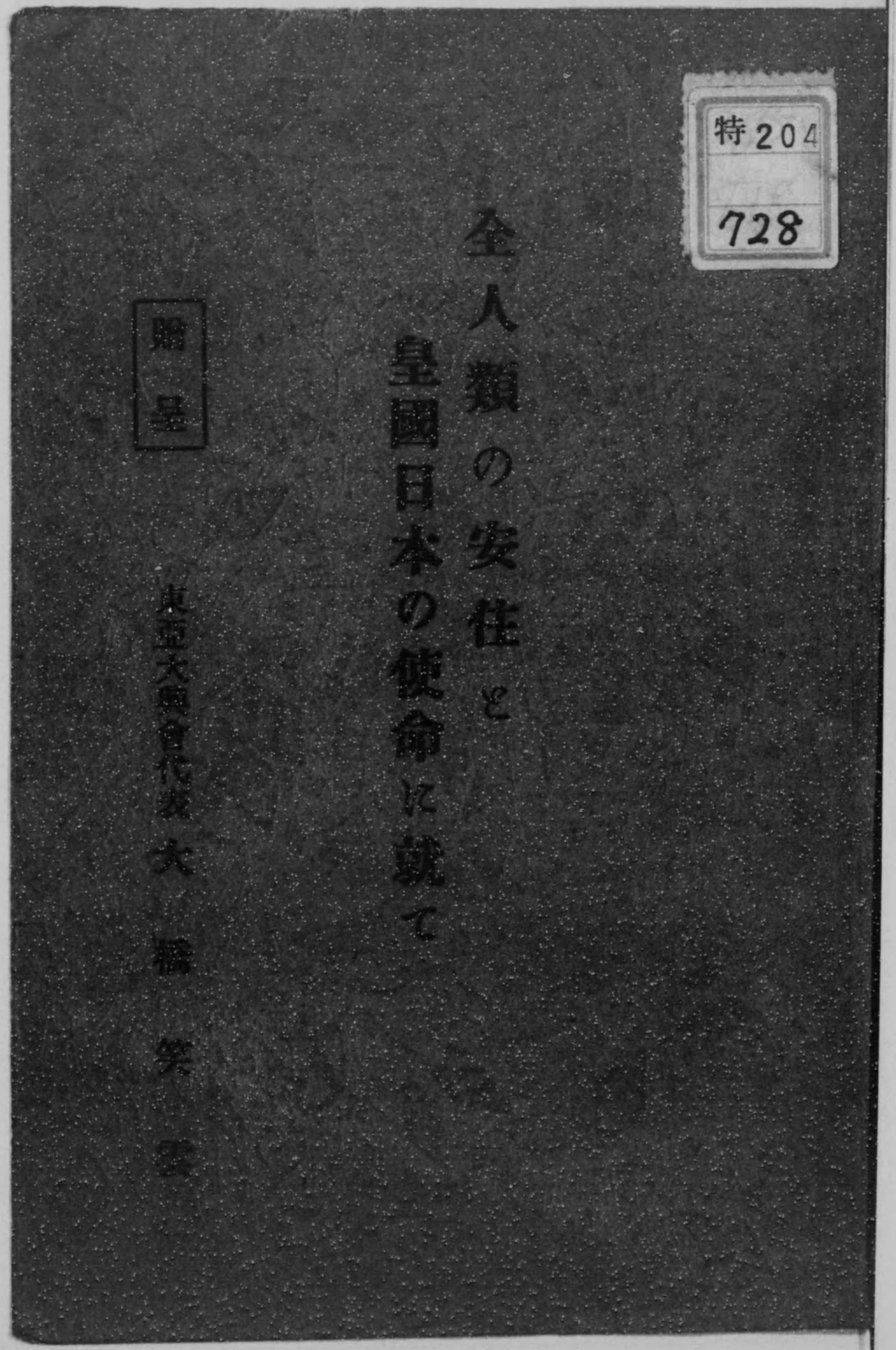


0003412000

0003412-000

特２０４－７２８

全人類の安住と皇国日本の使命に就て

東亜大興会・編

東亜大興会

昭和１３

ABA

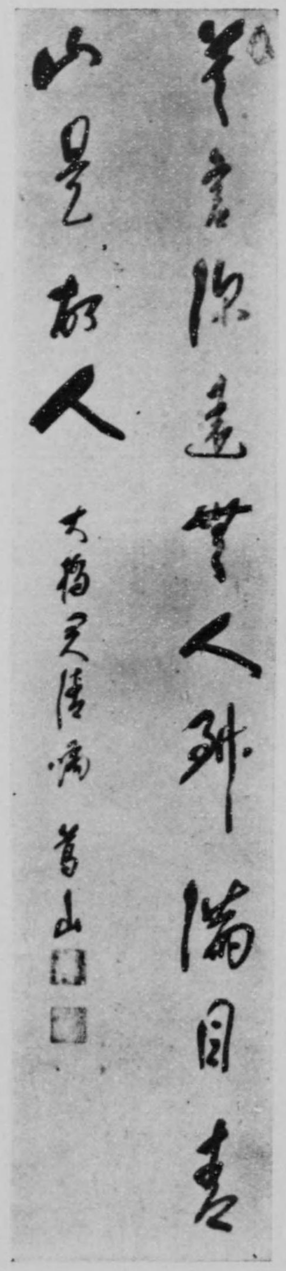
特204
728

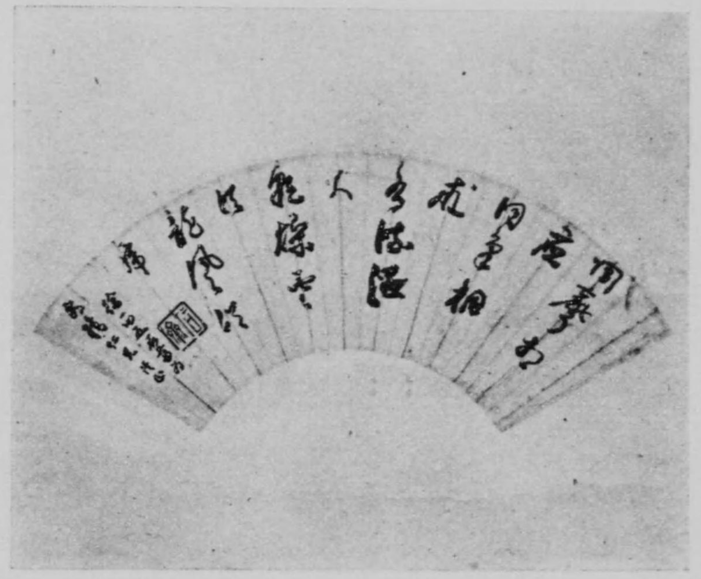
全人類の安住と
皇國日本の使命に就て

贈呈

東亞大興會代表 大橋笑雲

待204
928





はしがき

發行所寄贈本

我東亞大興會は臨濟宗の居士、筆者等を中心として、後藤、華山の兩老師顧問となり、去る昭和七年の春成立したものである。

その際その主旨として發表したものが左の如くである。

東亞大興會設立趣旨

東亞に於ける常恒的平和の象徴であり、止揚である處の、滿蒙の樂土鄉的出現、夫は、蓋し數世紀我國の士百年の念願であつた。然して、今や、之が實現は滿洲新國家の形態として、立派に建設大成されたのである。言ふ迄もなく聯盟諸國の承認不承認、或は聯盟國調査員去來等、夫が將來如何なる形式によつて働きかけようとも、滿洲國の興隆進展には些の痛痒をも感ずるものではあるまい思ふに、得ることは易く讓ることは難い。

新滿洲國をして、將來、眞箇の樂土鄉たらしめるには、安價な唯物論的邪道や享樂主義的風潮乃至狹量な愛國的排他主義などに依つては得らる可きものではない。

何處迄も近視的小我小見を捨て、萬法を抱擁して餘さゞる底の大乘的襟度を持つて、各民族の個性天分を認め、箇々の色素よく萬古の綿繍を織つてこそ、眞の樂土鄕建設の實を擧げ得るのである滿蒙オーケストラーの、天籟的旋律、夫は天上と云はず西方と云はず、永遠に東亞の天地に反響して妙音よく天下の人心をして純眞和協の境に遊ばしめ、以て凡有る爲政家庶民皆偕に各自の本分を全うせしめねばならぬ。

王道既に天下に普し、率土の生靈咸な光被を仰ぎ、草木昆蟲と雖も各其の所を得、斯くして、滿洲新國家は、その國體理想の發揚をして、彌々旺ならしめぬばならぬ。

吾が東亞大興會は如此要求に因つて生れたものである。

看！前途には陽が輝いてゐる

昭和七年四月二十六日

東亞大興會代表　吹雲居士　大橋松太郎

顧問

臨濟大學長　後藤瑞巖老師

顧問

臨濟宗朝鮮布教監督　華山大義老師

爾來發表したるものゝ內、その主なるものを集錄して爰に一冊としたものである。從つて中には重複したものがあり、遺憾とするところであるが、併し是等は皆本會員數人又は數十人が分擔調査し協力に成るもので孰れも顧問華山大義老師の指導と校閱を經たるものゝみである。而して筆者の法號を「吹雲」と云ふは師匠華山老師より給りたるもので、その裏面に「風吹碧落浮雲盡　月上青山玉一團」の揮毫がある。然るに此法號を今回「笑雲」と改めたのは、間宮英宗老師の仰せに仍るもので、筆者昨冬腦溢血を病み、師匠華山老師亦風邪で目下京都南禪寺境內法皇寺に靜養中である。間宮老師はこれ等を大に氣遣はれ、曰く自愛せねばならぬと。猶ほ既往は「吹雲」でよろしかつたが、將來。殊に支那人に對しては悠揚として迫らず、所謂萬事流川形で行くがよかろう。從つて法號もこれから「笑雲」と改めては如何と仰せられ、筆者も亦近來これを感じつゝありしことゝて、早速改めることゝしたのである。

猶ほ、今や言語文章よりも、より實行が大切となりつゝある樣であるから、我東亞會の如きもよ

ろしくその菩薩行に邁進すべき時ではあるまいかと問へば、老師は直ちにこれに賛成せられ、居士の如き幾多物心兩方面に體驗を有する實業家にして渡支、所謂各種各方面への菩薩行に邁進するならばその効果は大なるべく、ただに精神方面のみならず、物質方面に於ても、所謂專門家のみではどうも、もの足らぬ所があり、徹底せぬ所があつて完成し難いことが多い。從て玆に道案内者があり、第三者としてこれを支持する人があつて、斡旋する人所謂蔭武者があり、その足らざるところを補へば、百年猶ほ且つ達成し難いことがらも、數年を出でずして達成し得るであろうことが、豫測し得らるゝであろうから、此際奮發して渡支し大にその隱德を積まれたい。と申されて揮毫されたものが本書第一に掲ぐる蕗葉の達磨で、その賛が「海月山雲千里色、碧天如水苔秋寒」である。而して「笑雲」の爲めにとしてあるのである。同時に揮毫されたのが徐州陷落の提燈行列で。その賛に徐州は「じよしう」で「除臭」と書いて我利の臭をさらりと去れば、東洋平和は萬歳だ、萬歳〳〵萬々歳と書かれたのである。

第二に掲ぐるは、現朝鮮軍司令官小磯國昭大將の書で、本會のために揮毫されたものである。その餘掲ぐる書は、筆者の友人で今は故人となれる徐丙五石齊氏の揮毫である。氏は曾て支那に遊び、支那を研究して筆者と志を同ふし、その協力を誓ひしところの人、必ずや本會今日の奮起を賛するであろうことを思ひ、爰に掲載して故人の德を偲ぶものである。

猶ほ本文の第一に掲ぐる「光は東方より」の一文は、師匠であり本會の顧問である後藤瑞巖老師最近の發表である。その內容は、過去二十數年來繰返し說かれたもので、別に新しいものではないが文章と成つたのは今回が始めてであるから爰に掲載したのである。

更に又、本書の題字なり序文は、華山老師に御願ひする筈であり又不可分のものでもあるが、老師は目下御病床中であるから、止むなく今回は略して、一日も早く老師の御全快を祈り、更に御指導を受けて大乘的進展を期せんとするものである。

昭和十三年六月二十一日

嶺南龍岡町之自宅に於て

筆者識す

目次

光は東方より……臨濟學院學長 東亞大興會顧問 後藤瑞巖……一

全人類の安住と我皇國日本の使命に就て（昭和十二年一月三日發表）……東亞大興會代表 大橋吹雲……一六

全亞細亞運動に就て‖指導原理と皇極の大道（昭和九年三月十三日發表）……東亞大興會代表 大橋吹雲……四〇

昭和維新の大國策とその基礎工作（昭和十年四月十五日發表）……東亞大興會代表 大橋吹雲……四八

時局感想（昭和十三年一月二十二日發表）……東亞大興會代表 大橋笑雲……六三

附錄

滿洲國と日本（昭和七年九月二十三日發表）……東亞大興會代表 大橋吹雲……六七

光は東方より

臨濟學院學長　後藤瑞巖

一、緒言

この「光は東方より」と言ふ聲が歐洲戰爭の中頃――大正にすると五六年頃から少しづゝ擧げられるに至り、戰爭後一しほ其の聲は大きくなつたが「光は東方より」の語は最近になつて言はれ始めたのではなく實は古くから言はれてゐたのである。と言ふのは、ズツトの昔ヨーロッパがまだ野蠻未開であつた時代に、恰かも太陽が東方より照らし初め漸次西へ世を明かるくして行く樣に、我々を文明に導く光明々々々と東方に向つて非常な熱心と憧憬とを以て呼びかけられた。其の聲が即ち「光は東方より」の最初で、それに呼應して西漸したのがクリスト教である。――クリストはアジヤの西端に生れたので西歐からすれば東方である――然るに歐洲大戰によつて永遠の劫火をまざ〳〵と見せつけられ如何にも暗い世界だ。誇つて居つた文明は實は劫火であつて、暗黑界を彷徨して居

つたに過ぎなかつたことを戰爭に於て經驗した。この心の動搖と、この暗黑の中へ光明を求めやうとする事が、更に「光は東方より」と言ふ聲を再生せしむるに至つたものゝ樣である。

爾來戰爭がすむ頃から東洋の研究が歐洲でなされ初めた。その結果、高楠博士の新修大藏經、我々すらも讀むに困難を感する無點本の佛敎全部を持つてゐる、この大藏經が大分輸出されたし、又ゾルフ大使等が東洋を研究したが、その最初に研究されたのが確か老、莊であつたと思ふ。即ち自然に歸る虛無恬淡と云ふ所に彼等の研究眠目があつたらしい。それから孔子、佛敎へと進んだのが一般の傾向だと思はれる。そして今日に持ち越された。つまり歐洲としては彼等の從來の文化の再檢討をしたその結果、正しい人類の世界へもつてゆく爲には別の光明、即ち東方の光明を持つて照らさねばならぬと知つた。この事が歐米思想家の一部上層階級に於て考へ始められた樣である。

二、西歐諸國と征服思想

さてこの東方の光を供給する所に思ひをめぐらして見なければならないのであるが、大體西洋文明は北方から民族が來たらめ地理的影響もあるが征服思想が汪溢してゐる。日本民族は元來が天然に順應する生活態度であるのに歐洲は日本よりも北に在るし然も北氷洋方面から南下した民族だから常に天然と戰ふと云ふ傳統を持つてゐる。例へばシベリヤでは日本の樣な生活は出來ない。シベリヤへ行くと冬ならば日が短かくて寒くもある。二重ガラスの窓を作り風を防ぐ外その間へオガ屑やカンナ屑を入れて遮斷して暖を取る。斯くて天然の寒さに對抗するが、夏になると日が長くて夜の八時過ぎ迄明るいからブラインドで日を遮へぎらぬと休息が取れない。此の樣に天然に順應して居れば負けてしまふから是れに勝たなければならぬ。即ち征服思想、これが歐洲文明の特徵と思ふ。だからヨーロッパでは文明とは天然を征服することだと云ふ思想が行はれて居る。更に精神文化の方面から見てクリストの生れた當時の社會狀態と云ふものが、又あまり都合がよくなかつた。微賤の生れであつた上に當時暴君が斷然專權を弄してゐた所で口を開いたのであるから彼等は抗爭氣分で充ちて居つた。求めよ、然らば天國の扉は開かれん、求めよ然らば與へられん。求道の態度としては好いとしても其の考へが瀰漫する所は政治上に及び、求めよ然らば與へられん、與へられんば奪はんと云ふ風になつて來て、流血の慘事や國體の變革が行はれ、それは同時に自我保存の倫理を產み自我主張の思想となつた何處までも自我中心である。それが國際上に表れて、自國中心

主義となり近世文明破綻の最後の幕となつた。近來頻々として起る國際上の紛糾を持つ國持たざる國等と云ふ考へ方も、總べて自國存立の爲め當然とされ、從つて正義も人道も結局こゝから割り出されてゐる。英語で權利と正義とが同一語である事も見逃がしてはならぬ。

極めて大まかに一是れには無論クリスト教の人達には異論があるに違ひなからうが——鳥瞰的に見て、この樣に言へると思ふ。

三、二つの東洋思想

飜つて光と憧憬される東洋のものは如何なるものであるか。第一に擧げられるのは佛教である。佛教は印度に生れた。そして儒教は黄河沿岸に發生した。この二つのものは其後何うなつたかと云ふに、まづ世界文化の搖籃印度に生れた佛教も鳥瞰的に見れば——發祥の地印度に於ては如何なる現狀か私よりもむしろ印度人をして物語らしめた方がよからう。

先年汎太平洋佛教青年大會が東京に開かれたが、代表者が神戸に上陸したその歡迎會の席上での答辭に

我が印度に於ては世界中の大宗教家中の大宗教家を生み出した。それは即ち釋迦である。

然るに此の教を印度が奉じてゐた間は、國は榮えてゐた（此れはカニシカ王やアイク王を思はせる）然るに暫くするともとの婆羅門教がぶり返し佛教を取り入れて印度教と云ふ形になつて佛教を驅逐して此の印度教が榮え今日に至つた。歷史的には此の間種々の事があるが佛教を捨てゝ以來印度の國威は下火になつて今日の樣な慘じめな有樣になつた。然るにあなた方の國日本は、佛教を何百年來育てゝ自分の榮養とし、今尙、育てつゝある。それ故に有色人種のリーダーとして旭日の勢ひを持つて居られる。

昔の恩義をお忘れにならぬのであつたら、我が國に佛教を戻して頂きたい——と云ふ挨拶であつた。

この裏には種々の意味もあり、外交上の重大な事件を起すから佛教に事よせて悲壯な考へを入れても居るが、佛教は如何に衰へてゐるかを物語つてゐる。發祥地の印度に於ては斯くの通りである

四、支那に於ける佛教

次に一時は日本佛教徒の憧れであつた所の仲介者支那は何うであるかと云ふに、これも先年、上海に行つた時、全部とは云はぬが我々の立場から云へば、緣の深い五山十刹の第一靈隱寺にも參り禪堂を拜觀した。禪堂は丁度此の妙心寺の方丈の室中を三つ位合せた程の大きさで四方單である。二段になつてゐて上の段が寢る所で少し下つて三尺幅位の單がある。私は晝間いつたのであるが、誰も坐禪してゐないばかりでなく萬年床があるではないか。實に驚いた、しかも其のまゝを外國人の佛教徒の我々に見られても一向恥と思はぬ。五山十刹の筆頭の此の寺に於て、これでは支那の佛教も駄目だなアと第一印象に感じた。他にも二三寺に參詣したが大體似たりよつたりで支那の禪風が窺はれる。而かも現在比較的禪が尊重されてゐると云ふのにこれであつて見れば佛教一般の狀勢が察せられる。況んや近來佛教寺院に支那政府は種々と斧鉞を加へ、少林寺が百姓の物置にされたり、駐屯兵營に使はれたりしてゐるから、凡てを察するに難くはない。これから見ても衰へたりとは云へ佛教の生命のあるのは日本だけだと云ふ事を眞實に感ずるのである。

五、日本に於ける佛教精神

日本こそ大乘的佛教相應の地であると古德が云はれたが、正にその通りで能く發達し且つ保存されて來た。又更に一つ注意すべきは日本が外交ずれのしなかつた事である。往々にして世間一般の日本觀は德川時代の鎖國の爲に、近代國家へのたち遲れとなり滿たされざる國となつたと云つてゐる。勿論さう云へるが、又別の見方も出來るのである。例へば朝鮮を見るに、こゝは完全に獨立した事がない。西の方から來る强國とは手を握らねばならず同時に東の强國とも內々款を通ずる事も必要であつた。隨つて外交ずれがしてゐるので彼等程外交辭令の巧い人種はない。此の點日本は愚直だと云へば愚直だが素直の道を步んで來たのである。德川が三百年間佛教を保護したのは墮落させられたとも一面から云へるが、溫床の中で育てられたとも云へる。摩擦をせずして、それ自體の道を進展したと考へても無理ではない。此の三百年は文化の方面から見て見逃してはならぬ所で日本獨特の進展があり、婦人の如き確かに特種の婦德を作り上げてゐる。

要するに佛教は千三百有餘年前聖德太子に依つて取り入れられ弘められ大道として徹底せしめられたが殊に法華經、唯摩經、勝鬘經等の大乘佛教中の大乘佛教が受け入れられ國民精神文化の基礎にせられ、爾後佛教は殆んど國教として保護奬勵せられて非常な進展を見ると同時に全く日本化し

て今日に至つたのである。

佛教は或る點から云へば氣魄がない迫力に於て欠ぐる所があると見られる所もあるが、又一方からすれば釋尊自身が示してござる樣に非常に圓滿性從つて抱擁性に富んでゐるとも見られるのである。

六、支那文明の現狀

次に支那文明に就て考へて見るに、明治の中葉に日本を訪れた大儒吳汝綸先生を島田蕃先生が接伴された時、島田先生は彼に向つて

「我が日本は近來歐米文明を取り入れて進んでは來たがやはり模倣文明に過ぎない。從つて別に御土產に持つて歸つて頂く樣なものは何もないが唯一つ忠孝と云ふ事がある。その文字も事柄も貴方の國から教はつた。貴方の國ではその實がなくて終つたが我が國では精華を發し實を結んだ。今日では可成衰へはしたが田舍に行けば未だ殘つて居るから、よく御覽になつて行つて下さい」と云はれたので、彼は事實各地を歩いてその事を確認し感心した、といふ事を聞いて居る。

現代の日本に於ては孔子の道、儒教精神が殆んど地を拂つたと云つてよい程に衰へては居るものゝ本場の支那は尙それ以上で、一時曲阜の孔子の本廟をこはして賣つて終はふとした事もあつた位である「金の切れ目が緣の切れ目」と云ふ日本では傾城に就いて言はれる樣な事實が支那では將軍と兵士との間に平氣で行はれてゐると聞いて居る、以て如何に爲政者も民衆も功利一片で動いてゐるかゞわかり、仁義忠孝と云ふ儒教精神が全く踏みにじられてゐる事が察せられる。

七、東洋文明の精華——世界への光明

以上の樣に見て來ると東洋の凡ゆる文化が集つてゐるのは我が神州日本であると云つてもそれは決して過言でもなく又自惚れでもない。歐洲人が求める光明が東洋だけの光であるなら、印度、支那の文化を融合して保存してゐる日本こそ、その源泉であると斷言出來るのである。日本以外の東洋の諸國何れも東洋文化は、それ〳〵保存しては居りませうが、日本とは比べものにはならない。東洋文化に關する限り日本が最も進んだ持主と言はるべきである。

最近は歐洲人でも參禪する人も出來たり可成り眞摯な態度はあるが、眞面目とはいへ、命がけで

はない。我が日本が印度、支那文明を輸入した頃の佛教徒の態度は、まことに健氣なもので命懸けであつた。眞摯どころではない命を的にしたのである。

東福の聖一國師が二週間程で支那から歸られたのが、最も順調な旅を續けられた記錄であつた。それは順風に惠まれ故障なしの航海であつたからである。今の様に大船があるわけではなく、唐津へ歸りたくとも風が變ればどこへ着くかわからぬ。航海が樂であつたら宇治の黃檗開山は隱元禪師ではなかつた筈だ。あれは禪師が弟子の弔合戰に渡日せられたと云はれて居る。弘法大師にしても傳教大師にしてもその他誰でも皆命懸けで求法したのだ。今アメリカ人等が遙々やつて來る。結構な事には違ひないが優秀民族の優越感を捨てゝと云ふ譯にはゆかぬ氣に見える。命懸けの夫れとは大分距離がある。隨つて眞個の理解迄には大分程遠いと思ふ。玆に面白い一例がある。今日のナチス獨逸の民性は大分變つて來たと云ふことだが、カイザーが曾て社會主義思想に惱まされた時忠君愛國思想涵養の爲め日本の忠臣藏の芝居を持つて行つた。その時私の友人がベルリン座でやつてゐるのを知り下宿の主人をつれて見に行つた。そして後でその所感を聞くと非常に感心して日本人の忠君愛國の思想は聞きしに勝るものであると。そこ迄はよかつたがその次の質問が振つてゐる。

「四十七人の人が命を的にして迄、あの大事をし遂げたが當時の月給はなんぼだつた」と聞くのであまりの質問に返答に困つたさうだ。

一年有半以前迄は扶持であつたが、浪人以後は生活の保障はないと答へたら、主人は、實に日本人は不可解の國民だ。權利を保有する所には義務があるが、何等權利を保有せずに義務だけを履行するのは不可解だと言つたと云つて私に話して呉れた。是れ實に言ふに言はれぬ崇高さで歐米人には理解されぬ所である。日本民族の胸にこのピンと來る快擧への感激は外交すれのせぬ特殊の温床に育まれた思想が凝つて神州の氣となつたからである。これが惟神の大道と儒道——そしてこれを徹底せしめた佛教によつて作りなされた神州の氣である。

夫故にこの日本精神文化の持つ滋味は五十年や七十年では外國人には中々了解出來ぬかと思ふ。之れを要するに東洋文化の神、儒、佛三道の融合したのが日本文化であるから東洋文化の總合統一されたものと云へる。隨つて歐米が光を東方に求めるとすればその好むと好まざるとに拘らず、日本以外に無いと云ふ事になる。であるから世界を暗黑から光明に導く文化の持主は我が皇國日本であると言つても決して過言でも自惚れでもない。

更に附加へるべき一大事がある、我が國が明治維新と共に歐米文化を取り入れ初めて、玆に七十年。己を空ふし私心を捨てゝ只管努力を拂つた——他民族には見られない日本民族獨特の美點だが——結果物質文化方面に於ては先進國を凌ぐ程に迄進展したが、同樣に精神文化も可成り好く受け入れられた。

八、皇國日本の使命

これから十分咀嚼し消化して在來保有して居る舊文化と融合せしむべき段階になつて來て居る。換言すれば東西兩洋の文化を綜合統一し新に世界人類の眞の文化を創造せねばならぬ狀態に直面して居る。此れが眞の意味の天の下を照らす光明であり、これが又日本民族でなくては果されない任務の樣に思はれる。皇國日本の使命責務は實に重且大と云はねばならぬ。

更に又日本が「日の本」即ち「光の源」とも云ふべき名を以て呼ばれ、國旗がよく夫れを象徴して居る。其れが二十世紀の今日、日本が世界へ光明を投げかけるべく命づけられたのではあるまいか圖らずもこの宿命になつて來たのは天意因緣がありはしないか、世界文明の救主たるの使命——

その中心は何か、皇道精神之れである。

九、菩薩道捧げの精神

菩薩と言へば觀音菩薩、地藏菩薩、などゝ云ふその菩薩、從つて拜む對象にされて來た爲に何か我々人間と遠つた存在の樣に思はれて居るが、實はそうではない。菩薩は印度語で、少し延べて言へば菩提薩埵。譯せば菩提は覺、薩埵は有情、人間を本位にして言へば、人と言つてもよい。すると覺めた人と言ふことで、眞に自覺せる人のことを菩薩と言ふのである。又禪では菩薩と列べて摩訶薩と言ふが、摩訶は大であるから大人と云ふことになる。之れを合せて言へば、自覺した大人格と云ふことになる。そこで個人的に言へば、自分を徹底見詰めて確かり自己を把握し同時に社會上に於ける環境に對する自己の位置を確認して、自信を以て仕事をして行く、これが眞實覺めた人で、同時に大人格即ち、菩薩、摩訶薩である。それを又國家的に擴げていふならば、國民が祖國日本をハツキリ認識し同時に、國際的地位をも確認して、其の存在の意義を明瞭にし、其の使命を遂行して行く、これが眞の自覺せる國家であり大國民である。玆まで自覺向上した大人格大國民は單に自

己の安住、換言すれば自己滿足獨善では斷じて終らない。必ず環境に強く働きかけて他をも覺めしめ自他共々和平の慶に浴し得るまでは永遠に努力を續けるのである。楠公の七生報國の精神も結局この願行に外ならない。要するに自覺々他で、自分が覺め他を覺めしむる。切言すれば、他を覺めしめんが爲に自ら覺むる、之れが菩薩で結局捧げの精神が本質である。

皇軍將士が自己の生命を鴻毛の輕きに比して、天皇陛下の爲めに忠誠を勵まるゝ處、全く菩薩行であり、又日本國家が自國の利害を顧みずして、支那民衆を覺醒し王道樂土を建設せしめ様と努力して居る現實の相。之れは國家としての菩薩行であり大乘精神の發露である。儒教で言へば、大學に「大學之道者在レ明二明德一在レ新レ民在レ止二至善一」とあるが、大人の學（まねふむ）べき道は先づ以て自己の本質たる明德（佛教の佛性）を明かにし（自覺）その力を他に及ぼし一般民衆を覺醒せしめ（新民）以て至善即ち絶體和平の慶に安住せしむる。之れが儒教の本義である。今日本が支那に對して、働きかけて居る行動を當てはめて見たならば、聖人の教ソックリではないか。であるから聖戰と言ひ聖業と言ふのである。

一〇、光は東方より

此の儒佛兩思想が我が固有の惟神の大道に吸收され咀嚼されて、今日の立派な皇道精神が出來上つたのである。この精神こそ自我中心で鬪爭を是れ事として居る世界を救ふ唯一の途である。曩きに滿洲國を建設せしめ、目下相當大きい犧牲を拂つて支援しつゝあるが、それは我が日本の生命線だからと言ふのではない。政治家はさう言ふかも知らぬが、皇道精神からは斷じて自己の生命線擁護ではない、三千萬民衆をして王道樂土を建設せしめ和平の慶に頼らしめんために努力を捧げて居るのである。それでこそ、皇道精神を以て世界を光被する第一歩と言へる。從つて今回の日支事變は第二歩である。

斯く見來る時滿洲事變と言ひ、今回の事變と言ひ非常に深い且高い天意がこもつて居る様に思はれる。大乘佛教の結晶無我の愛を以て捧げの聖業、世界に類例を見ない特異の日本精神、世界の救主としての皇道日本の相。

如何に偉大なるか。嗚呼光は東方より。

全人類の安住と
皇國日本の使命に就て

東亞大興會代表　大橋吹雲

（昭和十二年一月三日）

廣田內閣の、成立動因として、將た又、その使命的內容敢行の契機として、必然的に、劃策決定すべき運命に置かれた非常時內閣の、官僚によつて、六ケ月の歲月と、その智囊的總動員とを以つて、漸く決定されたものが「七大國策、十四項目」てふ、所謂非常時日本の國策、庶政一新の國策であつた。

想ふに、國策の基調は、云ふまでもなく「國防の充實」に、その重点が置かれてあり、自餘一切のものは、國防國策への、從屬的關係にあり、と云ふ事は、何人も否む事の出來ない處であつて、此事は、かの國策審議に臨んで「組閣精神玆に在り」と、現に軍部が主張したことによつても、明かである。

更に、之を、稅制改革に就いて見るに、その最も注目に價するものは、財產稅の創定であつて、

こは、這次庶政一新中の、先づ、白眉とも、稱すべきものであらう。何しろ、こは、稅制中その第一義的のものであつて、從來の收稅額の如きは、寧ろ第二義的のものと、見做され得るからである。

更に、語を換へて云ふならば、一朝事有るの秋に臨んでの、財源の確保と、政治的支配の集中强化とを、物語るものであつて、國策の重点は、國防の充實に在り、と云ふ理由、亦こゝにも、見出し得るからである。

此精神こそは、統制經濟示唆への、一運動として顯はれ來るべきものであつて、彼の「國家の統制强化を實現す可き必要を認め、新たに、國家の權力を以て、軍需工業の監督統制を、はかる可き法律の制定を計畫するに至つた」と傳へられ、且又、こは、現今、着々實行されつゝある處であつて、彼の產業統制局、貿易局が、新たに、設置された事は、そのよい實例であらう。

これによつてこれを見るに、軍需工業は云ふに及ばず、金融外國貿易、その他經濟の全分野に亘つて今後、一層、强力なる統制が、擴充されるであらう事は、萬人の容易に頷き得る處であつて、更に、之を、廣義國防と云ふ見地に立脚して看るに、義務教育延長に關する問題にせよ、中商工業の組織化、手工工業の指導等に關する問題にせよ、更に又、より重要なものとして、現に問題化

きれつゝある處の、農山漁村に關する救濟對策にしても、擧げて、之を廣義國防問題と見るに於て何の不思議があらう。こと程左樣に、國防は、國策の源泉たるのみならず、庶政中、凡有る部門を通じて、貫流せる處の潛勢力であつて、吾々國民の、最も直接的な關係に在る處の、國民生活安定の問題にしても、如斯き機構の下に於て、國策の遂行が、計畫されてゐるのだと見ても、先づ、誤りの無い處であらう。

以上檢討し來つた處に從へば、如斯き國防的强力統制精神によつて、非常時日本の國策、庶政一新の國策が、築き上げられてゐると云ふ事は、確な事實であつて、少くとも此の點丈は、明かに一新と唱へ得べく、その他に於ては、概して、特に一新と認む可き程のものが無い樣に見受けられる況んやその一新的內容に於てをやである。

何故ならば、一部の者をして、極度に、その神經を刺戟せしめた處の、所謂「昭和維新」「國家改造」と云ふことも、結局、大した結論にも到達する事なくして、その終結を告げ、今日の、庶政一新と云ふ、御座なり的な國策に終始した事は、尠なからず、國民の總意的期待を裏切り去つたものであつて、全く「開けて見れば猫の糞かな」式に、閉幕されたからである。

如斯は、獨り廣田內閣の罪と稱すべきで無く、且又、寺內陸相の、迫力不足の結果だ、とのみ斷じ得ないであらう。玆に、見逃し得ざるものは、凡有る方面に向つて、隱然作用をなしつゝある處の資本主義的力の存在である。

最近、我國に於て、何等かファッショ的色彩の、日と共に濃厚になり行く點は、誰もが、認識せる處であらうが、此のファッショたるや、或意味に於て、資本主義的動向と合流すべき、因果關係にあるの事實を、知る時、誰しもが、這次國策の成立的因由と、その歸結的必然性に就いては、全く、故なきに非ざるの事を領得し得るであらう。

かく論じ來る時、或は、吾人を以て、何等か、反ファッショ的乃至反資本主義的思想でも抱けるに非すやとの疑念を、挿む人無しとせざらんも、若し然りとせば、そは全く早計であると云ふことを、玆で特に、指摘して置きたいと思ふのである。何となれば、然れば、國策遂行の契機をして、ソビエート式たらしめんかと云ふに、そは吾國の斷じて容認し得ざる處であつて、今更喋々を要せざる處である。然らば、英佛者流の、自由主義的民主々義的議會政治の策をとるかと云ふに、當面せる現下非常時を突破して、竿頭更に躍進一歩の、新日本建設に臨んで、その强力政治斷行を期するに

は餘りにも、その實行力が乏しいと云ふ事實は、過ぐる日の、イ、エ紛爭に見ても明かである。英佛兩國の支配下にある處の國際聯盟が、その紛爭に會ふや、全くその使命的實力を發動し得ずしてムツソリーニをして、徒らに、天馬空を行かしめ、以て、その名と實とを成さしめた以外の、何ものでも無かつた事を思へば、思ひ半に過ぐるものがあらう。

更に、眼を現在なほ燃え盛る、スペイン內亂に注がんか、勃發頭初、佛國政府が、自國と相容れざる政治國策に立つ處の、反軍を抑へんと試みしに拘らず、遂に、事、志と異なる現狀に至りたりし事は、全く、實行力の相伴はざりし所以たることは、注目に價ひするであらう。

之等の事實に徴して、遙かに實行力ある、ムツソリーニ式乃至はナチス式を採らんとするか、と云ふに、是亦、吾黨の斷じて與せざる處である。彼等にして、一朝、若し、失敗せんか、これ等獨裁者流は云ふに及ばず、その國民の全部までが、恰も飛行機墜落の非運を見るが如き危險に曝されるる歷然たる因果律圈內にあるからである。

然らば、未曾有の非常時最前線に立つ處の、吾國は、國民として、如何なる準備と信念を以て、之に對處すべきかと云ふに、吾が皇國日本には、自からとるべき道があるからである。そは云ふまでもなく、古來吾國は、人事諸政百般悉く皆　天皇中心主義によつて、行はるべきものであつて　天皇を措いては、土地人民乃至政治行政經濟も無いと云ふ事である。換言せば、萬事萬端　天皇の御威光を出でずと云ふ事である蓋し、これは、先規の風規、今時の樞要だからである。

更に、これを具體的に云ふなれば、庶政一新と云ひ、國策遂行と云ふも、但單に、機構上の、制度、形式を建て直すと云ふのみで無く、改革精神そのものゝ、根本的建直しで無くてはならず、又一新的機構制度上に躍る人物そのものゝ、精神的一新でなければならぬと云ふ事である。形式や制度が一新されたにせよ、より根本的な、そして、より大切な、運用者そのものゝ精神が、改められざる限り、無意義だからである住む建物が、立派であつたり、法律規則その他の制度が立派であつても、住み手が惡るかつたり、その人の精神が歪んでゐたんでは、事實として、すべては、無用の長物としかならないからである。

如斯、庶政一新の根本問題は、制度でなく、寧ろ、運用者自身の精神にある、と主張して來たが然らば、その精神は、如何に一新すべきか、と云ふ事になるが、その答へたるや、極めて簡單であつて「眞箇の日本人に立還れ」と云ふ一語に盡きる。

由來、我が國は　天皇中心主義で一貫し、その萬世不易たるや、允に萬里一條の鐵路なのである。故に、我が國民たる者は、須く先づ、深い反省的信念に訴へて、この一大事實に對する、正明的確なる、認識を喚起すると共に、自省一番、以て奉公の赤誠を盡すの覺悟をして、より一層新たならしめることが、正に肝要事中の肝要事なのである。何となれば、こゝにのみ、眞實日本の姿があるからである。皇極日本國體理想發揚の源泉、亦こゝにあるからである。

蓋し、我が國體理想たるや、道統、建國の二神勅によつて明かなる如く　天祖の、一つは天ノ忍穗耳尊に「吾兒視ニ此寶鏡一當レ猶レ視レ吾、可ニ與同床共殿以爲ニ寶鏡一」と、宣らせ玉ふて、父子の親を厚うし、祭祠の義を重んじ玉ひ、他は皇尊瓊々杵尊に「葦原ノ千五百秋ノ瑞穗ノ國ハ是レ我ガ子孫王たるべきの地也、宜しく汝皇孫就て治む可し、行け寶祚の隆なることは當に天壤と窮り無かるべし」と、宣らせ玉ふて、建國の大本を固め、君臣の大義を定め玉ひしことは、天下咸な知るの事實であつて、是れ吾が天祖神明の大道であり、又王者の正敎である。これ即ち、吾が朝　皇極の大道ある所以である。

如斯、吾が　皇家の威德、巍々焉として、萬國に卓絶せるの理や、國民の一人だも知らざる者の無き事實は、云ふだけ野暮であらうが、「理に明かなるも、未だ、悟りならず」の言の如く、之が國民的實踐に關する限り、未だ悟りならざるものが、國民の上下滔々たるの事實、それは一體何故であらうか？　實に不忠の臣と云ふ可く、筆者の以て常に遺憾とする處である。

二神勅たるや、我國民の、つねに靈受神得す可き、絶對信念であらねばならぬのである。然るにも拘らず、これを身讀服膺するの道を忘れ、唯單に、學としての歷史として扱ひ、乃至、國學的研究の對照資料としてのみ看過して事終はんぬとせるもの、

往々巷に見受けらるゝは、甚だ遺憾とするところである。必らずや、之に注ぐに、血滴々を以てして、國民文化生活の血流的源泉たらしめなければならぬ。こゝにこそ天皇を中心とする、日本國家の眞面目があり、人類大和と八紘一宇を内容とする、皇道精神發揚の國體理想が生きるのである。然らずんば、國體理想も、所謂、文字通りの理想たるに止まりて、本來の活力體としての生命は失はるゝの外はあるまい。かく云へば、そんな事は百も承知だ、小學生でも知つてゐるぢやないか、と輕視し去る人無しとせざらんも、そは道ふことは能く道ひ得たり、未だ實ならずの類であつて、恰も太陽空氣中に生存せるを知つて、未だ　皇恩の鴻大なるを、知らざる底の忘恩漢なりと、斷せざるを得ないのである。

理由は簡單である。闔國、最近頻りに、國體明徴を叫ばなければならぬ事實に徴しても明徴遮蔽の徒の如何に多きかを知るに十分であらう。更に況んや、明治維新以來舶來の箇人的自由思想にかぶれた痴漢隨所に現はれて、徒らに權利思想を增長し、日夜我利々々に吸々として國家を忘れ　陛下の御威光を忘れ果てた、非國民あるをやである。

省みるに、世上蕩々輕薄に墮し、國家交々利を重じて、國危きの狀や、轉た憂國の情、切々胸を打つの慨あらんとす。若し夫れ地位を利用し、その名に隱れ、私利私慾を恣にして國家あるを知らず、又一脈之と相通じ、利權私腹を事として恬然、國民の福利を省みざる徒輩あるを聞くに至つては、又何をか云はんやである。

自から國家の柱石を以て任ずる底の爲政者、財閥の諸公子！　須く脚下を照顧すべきでは無いか、憂國の士の、今にして立たずんば、國家の安泰又何處にか得來るべき。要は、自己の利田權勢たりと雖も、皆是れ、畢竟國家の有なりと云ふ、大自覺と信念に還るの一途あるのみ、そこにのみ、眞の自利々他覺行圓滿てふ悲願成り、奉公義勇の念湧然として內に漲り、時に觸れ機に臨んで、之が發動の素因たるの實を示す可きである。夫れにも拘らず「土も木もいづく王地に非ざるや」の信念日と共に國民の心

より薄らぎ去り、今や全く死滅に瀕せんとす。又危いかな。

君民一體、億兆一心、感恩報和の影あはく、おのが權勢、おのが利田と、追ひてやむなき底なしの淵に、さまよひ醒めぬ盲龜の、恰もよし、權利義務てふ舶來思想にかじを絶え、たゞ唄ふ知識萬能の片小舟、げに我慾偏智の痴れものとなり果つるこそはあはれならずや。

今や道德的善念、宗教的情操、日と共に薄らぎ去つてその國家觀念同胞相愛の情、爲に涸れて、名のみあつて實なきに想ひを寄するもの、皆倶に、寒心措かざるの情やげに宜べなりと謂ふべく豈に夫れ照顧脚下すべけんや。今にして還鄉の秘曲を彈せずんば、いつの日にか新日本建設の偉業成らん。

偏智の餘り、たゞ唯物的經濟的にのみ處理して、流轉の迷夢未だ醒めやらず、人生向上又更に精神文化的宗教的の好消息あるを認識せざるこそ、國家百年の計を誤るものと知るべし。識者よくこの理を察知すべきである。窺ひ見んには、餘りにも深く遠きが故に、誤魔化し去らんとするのか、若し然りとすれば、卑怯の譏り不眞面目の汚名また免れざるべけん。何故に、懸崖に手を撒して、自得法悦の眞境界を、滿喫せざる叩けよ開けん！　道近きに在り、偏智小見こそは、道をして却て遠ざからしむるものではないか。人稱し、我れ亦た、自惚れの、世の多くの、インテリの君よ、君こそは王陽明氏を煩はすまでもなく、人生の兩面を見ざる底の擔板漢では無いか。庶政一新も佛作つて靈入れずの、可憐生にし去らずんば、幸であらう。

眞個の日本精神に還りて、更生の新日本建設の大業に從はんとするの士、そして皇極の大旆をして世界に飜さしめんとするの上士は、先づ、大乘佛教の新生命「自利利他覺行圓滿」に目醒め、學問の總府たる禪に參じて、殺人刀（我慾小知見を殺盡する）活人劍（智惠に基く全自己活動、やがてこれ古人奉公の活作略）の切れ味を知れ。これ吾が祖先の、皆以て、輩新向上の利刀として、用ひ得て妙たり し、傳家の寶刀ならずや。蓋しこれ、上古の風規、今時の樞要だからである。大乘佛

敎こそは、印度に支那に栽培繁茂し、大乘相應の地とさへ稱せらるゝ我國に來て、花咲き果を結びし、日本獨特の、人文精華ではある。一面又、我國民が、永く骨肉の親として、日本精神培養の、根幹的使命を果しゐるの因由を知り、正にこれ、文化成生の配偶者であり、母たりし好因緣に、思ひを寄する時、誰か望上の念起らざらん。

我慾偏智の泗疾を救ひ、眞個の人間道完成への道に立還らんには、祖先以來、既に血となり肉となれる、歷史ある傳家の寶刀を措いては、他に無いではないか。すたれつる古文ども、動き出で、御代あらためつ時の行ければ、何の幸ぞ、我が大乘佛敎たるや、他の哲學科學と相容れざる流の宗敎とその撰を異にして、宗敎であると同時に科學であり哲學たる、眞に、現代文化人をして、滿足せしめ得る底の、文化の一大總合殿堂たるをやである、そこにも、西洋流の宗敎觀から還つて、東洋的特に、日本佛敎(印度佛敎支那佛敎とも異り日本獨特の文化を通して換骨大成した)精神の再認識につとめなければならぬのである。

我國に傳來して以來、鎭護國家と下化衆生に終始一貫し、以て君民一體、一如精神を敎へ、怨親平等生死一如、奉公義勇の大魂魄を培ひあげて、わが大和魂をして大成せしめ來つた大乘禪こそは又實に日本精神の骨髓であり、實行的彈力あるものたらしめた素地では無かつたか。大乘禪による眞の無我道徹底にこそ、生死を明むる底の妙悟があり、不動地靈妙の神境があつたではないか。無我盡忠報國の誠を如實に示した、幾多の忠臣を打出したりしことは、忠誠報國の背後を飾るの秘話として、歷史の證明する處ではないか。皆是れ悉く殺人刀活人劍の使ひ手であつたことを、銘記す可きである。此大精神にこそ、己が權勢利田、咸な是れ、我が大君の御威光にこそと、仰ぎまつりて、その聖恩鴻大なるに感泣するのである。こゝに至つてか、己我の念また、何處にかあらんやである。

夜もすがら佛の道を尋ぬれば神の道にぞ尋ね入りぬる。

かくてこそ、我が皇極精神の　天皇中心主義一貫の眞實義徹底顯揚の日本精神たり

得るのである。國民のすべては、深くこゝに省察の眼を投じて、君民一體國家一家族たるの國體觀念に終始しなければならぬのである。若し然らずんば、豈それ、眞箇大丈夫底の日本人と稱し得可けんや。識者請ふ、敢て辨別せんことを。

民の富は、是れ朕の富、民の幸福は、是れ朕の幸福とは、正に是れ、御歷代御愈る事無きの大御心であり、臣下また、この大御親心にこそ安住和樂の赤子たり得るのである。「有り難や、かゝるみ親に生れ來て、何不足なき、御代に住むかな」の赤心にこそ「罪あらば我れを咎めよ天つ神、民は我が身の生みし子なれば」てふ大御親心の億兆もらさじの大悲願あらめ。嗚呼！　感泣何んの加ふるものあらん。親子の情切々胸を打つの處國體明徵また何んの論らふものあらん。

夫れ國體を汚し國勢を傾くる者は正に是れ獅子心中の虫と知れ。內憂外患危急存亡の秋に直面しての最大關心事は外敵でなく寧ろ內賊たりの一事と知れ。今や我が國は未曾有の國際的危機に直面しつゝも內正に幕末的形勢を再現して非國民的存在たる既成勢力あるが爲めに半身不隨的狀態に陷り對岸隨處に抗日的不祥事件突發して我が同胞兄弟の眼前惡鬼の兇刃に倒るゝを見て茫然たるの事實悲憤何ぞ堪へん。

かゝる國辱的不祥事に臨んで、その背後に、口に人道を說き平和を說くも實は內心夜叉の我利的野心に燃えた白色老獪國の毒手あるを徒らに恨む以前何すれぞ和協一致捨私報國の誠を致すの實に就かざる。

第二世界戰爭の動因たる可しと泰西圈國擧つて眼を瞠りつゝあるスペイン動亂も內部的不和にその原因あるが爲めではないか、勿論外的原因ありとせんもそは一に內部の虛に乘じての作用に外ならないのである。泰西の風雲果して何處にか治まる可きと不安まだ去らざるの時忽焉東天亦風雲急ならんとは、內蒙獨立義軍の蹶起を機緣として、今將に自から任ずる東洋の盟主日本は英米を背景とせる支那國民政府と全面的衝突の危機に遭遇せるに非ずや一方又中國共產軍及び外蒙赤軍の背後的黑幕に躍るソビエットロシヤとの不可避的對峙の日の刻々と迫り來る現狀を見せつけられては東亞

の天地の一大修羅場と化するなしと誰が云ひ得ようぞ看よ對岸支那昨今の動亂を蔣介石氏の生死果して何れにあるにもせよ、全面的動搖と南京政府集中的權威向落の悲や想像するに難かる可く況んや隨處隨時に第二第三の學良的クデターの突發するなしと斷じ得ざるに於てをやである。

かゝる時その虚に乘じて傍若無人にも實力掩護の下に誰憚らず得意の赤色魔手を延べ出したのは彼れソ聯の常套手段たるや火を見るよりも明かである、然らば防共を以て對外國策とする我が日本の關心是れに過ぎたるもの無からん。

かゝる必然的な不可避的過程にある日本の之に對する用意と覺悟は果して十全と云ひ得ようか、外交的軍事的方面はその專門に一任するとして筆者の最も關心事であり且つ力說せんとすることは何はさて措き先づ第一に國民總意の和協一致些のゆるぎなき團結力である。そこにのみ萬國に比類なき日本精神の發露があり　天皇中心主義一貫の皇極精神の顯現がある。

君が代を思ふ心の一筋に

我が身ありとは思はざりけり

恁ふした君國絕對奉公の至情にこそ日本人たるの面目がある、此至情こそは我國の至寶であり唯一の財產であつて、世界の思想が如何なる變化を來さうとも永遠に渝ることなき護國の燈明で、益々涵養以て子孫に傳ふ可きである。

身はたとへ武藏の野邊に朽ちぬとも

とゞめ置かまし大和魂

筆者さきに、我が國には別に道ありと主張したのは全くこゝにあるのである。此道にして些の遮ぎるものなくんば、內治にしろ外交にしろ、又何をか加へんやである。識者よ夫れ照顧脚下よくこゝに留意して外に備へ、庶政一新の眞實義を徹底顯揚せんことを切望して止まないのである。文中の過言一に唯憂國の赤心以外、他意なきを諒恕されたい。

昔より流れたえせぬ五十鈴川

なほ萬代も澄まんとぞ思ふ

× ×

我が東亞大興會は去る昭和七年九月二十三日「滿洲國と日本」と題する宣言書中に滿洲中央銀行の創設を主張し、併而金に膠著するの愚を表明して置いた。此の点、今にして一層必要なるの事象を痛感するが故に、玆に重ねて摘錄することにした。

滿洲中央銀行の創設

目下存立の資本金三千萬圓の中央銀行、這は過度的事務の一階梯に過ぎざる可く速に滿洲國民をうつて一丸とした總國民を株主とせる資本金は少なくも五億圓以上のものを創設せざる可らず。

滿洲國三千萬の民衆中、滿洲國中央銀行株、引受能力を有するもの約二割と見るも六百萬人一株の金額は百圓とするも六億の資本金となる、此の株式は數人して一株を共有するもよく又一人で數十、數百千の株式を引受くるもよし、而して之が株式拂込みに付き現金を有せざるものには朝鮮銀行より融通の途を開いて遣ればよい、其見返り擔保としては其株主の有する有形、無形の總財産につき抵當權又は質權を設定なさしめて置けばよい猶ほ其株券をも見返りとして保管し置くことゝすれば朝鮮銀行に損害の來る筈は無い又朝鮮銀行は之が貸出しのために兌換券の發行も大した增額となるには到るまい、何となれば株式拂込の爲め一旦貸出したる鮮銀紙幣は直ちに滿洲國中央銀行創立事務代表者の名義を以て朝鮮銀行に預金さるゝに到るからである斯くして成立したる滿洲國中央銀行は基礎眞に大盤石、金融は勿論、各種の社會政策に又調節に圓滿無碍の妙味を發揮し得、所謂眞箇の樂土鄕は常恒不變のものとして幾久しく出現するに到る可し。

ソビエート、ロシヤ產業五ケ年計畫、スターリン株式に比し穩健着實なる、其運用に妙味ある、天地雲泥の差ある可し、滿洲國眞箇の樂土鄕たるには此の眞土臺たる而も此の簡單なる施設を以て始めとす。

金に膠着せぬこと

現代人は餘りに金に執着が過ぎる、殊にブロック經濟が叫ばれて居る今日、大に反省するの要があろう。

滿洲國で要する資金は滿洲自體の資源により工夫し案出すべく助成する事が大切である徒らに日本より金を投ずる事は勞して効なく這は恰も彼の施肥度を過して實らざる作物に等しいであろう。

二宮尊徳翁は宇津家復興に就て、領主大久保加賀守に對し、私はお上から、一文の金も要らぬ…今日まで宇津家復興の思召あつて、しかもその實少しもあがらぬのは、正しく莫大の費用を御下げ渡しのためかと存じます、又恐れながら御前。わが日本六十餘州、西は長崎から、北は松前の端々まで、良田、良野、何萬億町とございます。この莫大の良田を、未だ異國から金子を借りて拓いたとはきいてをりませぬと答へたではないか。我神武天皇、我國をお拓きになつた時金子を御持ちになつて居られたか如何か、自力更生の叫ばるゝ今日識者は深く思ひを玆に留むべきであろう、假令一時は應急の支出ありとするも、這は他日眞の義務者が成長したる時に負擔せしむべく今より培ふことが大切である、よろしく項目一に提案せる滿洲中央銀行五億の資本を利用することも一方策であり同時に各方面に亘つて工夫することがより肝要である。

滿洲國內に於ける我國產品の輸出狀況は今や殆んど獨占に近く旺盛なる事實を如何に見る?!!若し夫れ沿海洲に南支に將又印度地方に於ても眞に我が誠の道を謳歌して飜然我に歸入するの日あらんか問題は、急轉直下、疾風迅雷的に好轉して金の溢れる時代が來よう。

以上の二項目は要するに總人民とその總財產引當の一體不可分の銀行をつくれと云ふことである換言すれば兌換券發行準備の金、銀塊の有無に拘らず、何等の脅威あることなき我が皇道精神宣揚發露の一端としての銀行をつくれと云ふのである、要するに國幣をして安全不變の價値あらしむる銀行をつくれと云ふのである。

既に述べし如く、上來の經濟政策は昭和七年滿洲國誕生と共に之を献策進言したるにも拘らず不幸にして、我が爲政者の容れざりし爲めに、最早巨額の國富既に國外遠く遁逃したであろうことは想像に難くないのである。これを北支より滿洲に來る日稼勞働者だけに就て見ても、年々數億の金は彼等によつて北支に持ち去られ、夫が蔣介石の手によつてまんまと南方へ搔浚はれたものが更に轉じてユダヤ民族の掌裡に入るのが今日の現狀だ。

是によつて之を見るに我國內如何に採金に努力しその增額を圖ると雖も彼等出稼勞働者よりの遁逃額に比しては遠く及ばざるものがあるではないか。この事實に對して知るか知らざるか、何等の對策を講ずることなくして放任するのは、庶政一新でもあるまい、こは實に、曾てなき尨大な豫算

を要する現下の非常時に對してその理解未だ徹底せざるが爲めなりとのみ云ふ可けんやであらう。廣田首相の裁斷や如何永井拓相馬場藏相亦健全なりや否や、と云ひたいのである。若し夫れ金の國外流失を慮るゝの餘り鮮銀乃至東拓の北支進出を制肘するとせんか實に以て醜態の限りであろう。よりよき物にかはるに何の心配がある。爲政家たるもの、須く、より眞摯に、一層透徹したる識見を持たる可し、と敢て進言する次第である。次に滿洲に於ける農業從事者殊に小作人に關する限り北支よりの移住を歡迎し抱擁しては如何。然らば彼等は生命財産の保證されてある、安樂鄕たる滿洲には喜んで永住することゝなり、從つて彼等勞働者によつて持ち出されつゝある金の流失は自から停止するではないか。我々日本人の食糧は日本人自から耕作す可しと云つた融通性に乏しい小さな量見は大國民のとるべき道でもあるまい。そこにこそ日滿支一體てふ大精神も親はるゝのである、識者は須く眼を大とす可きでこれ實に個性天分の發揚に機會均等を與ふるの道ともなるに非すや。

最後に、注意す可きは支那人に對し所謂文化の押賣りをしてはならぬことである。近來の當局者は口を開けば、先づ開發と云ふのがその常套語の樣であるが、自らは如何と云ひたいのである。開發を叫ぶ前に卒先して已を開發することが肝要ではあるまいか。更に況んや之を强ゆることの餘りに急ならんか彼等支那人は神經衰弱に陷るの外はあるまい。それ故自己の獨斷のみを以てして支那國民性の如何なるものなるかをも顧みざるが如き思想こそ、抗日の一動因ともなるべきことをも十分注意す可きである。彼等には彼ら獨特の傳統がある。將來はいざ知らず、彼等の現狀よりして、彼等の安民幸福の道は農に親しむことである。然るにも拘らず、今直ちに換ゆるに工を以てせしめんとするが如き押しつけがましい干涉は大の禁物である。吾等日本國民は飽くまで大國民たるものの矜持と、責任ある亞細亞の盟主としての貫錄とを堅持して「君子重からずんば威あらず」の道に終始す可きである。

如斯矜持の下に大亞細亞に臨む限り、その公安を妨げ或は傷けんとするもの假令へば抗日排貨の如きものに對しては用捨なく驅除絕滅の斷行が必要である。又自己の權勢のみに吸々として、他を顧みざるが如き徒輩は眞に東洋の平和を破り、民衆の幸福を奪ふものであつて、一日も早く之を强制的に反省せしむ可きである。然し乍らあくまでも

日本朝野一致團結眞に東洋平和を念願する底の皇極大精神に則つて党派的根性は此際一掃して大國民的襟度に出なければならぬのである。かくてこそ大亞細亞建設てふ理想に即したる我が皇國の國策も庶政一新を契機として更に一段の進歩と色彩とを添へ

全亞細亞運動に就て

（昭和九年三月十三日）

——指導原理と皇極の大道——

東亞大興會代表　大橋吹雲

全亞細亞運動!!　夫は、大亞細亞復興運動にせよ、亞細亞聯盟運動にせよ、將又、亞細亞單一統制運動にもせよ、命題そのものゝ何であれ、つまり、それは或意味に於ける、解放運動であり、覺醒運動である限り、全亞細亞民族の、一大自覺に訴ふ可きは勿論である。と同時に、必ずや、そこには、確乎たる信念的理想と、現實的指導原理とが無くてはならぬであらう。

そこで、目標とするところのものは、畢竟、何である可きかが、問題となつて來る。

幸にして、日本民族は、王道主義を實踐して、君民一體に生き、その國體理想たる皇極精神を發揚して、全人類に、その範を示し來つたのである。然も、それは、彼等の持ち來れる、三千年の歷史が、雄辯に物語つてゐるのである。彼等は咀嚼するに、神儒佛の三を以てして、よくそれを血となし、肉となし、髓たらしめて、東洋文化の精華を大成した許りでなく、泰西文物の長をも攝取し盡して、よく自己のものとした。斯くして東西文化融合者としての、日本民族は、本來固有の大日本精神をして、益々光輝あらしめたのみならず、常恒に日出する國の民族として、その精神必然の使命果遂に勇躍しつゝあるのである。

目標既に如上なる限り、全アジヤ運動は、單に、歐米白人に對抗せんが爲めのものであつてはならない。

日本精神たるや、夫自身、東西古今を貫く底の、普遍妥當性を、保持してゐるからである。

皇極の大道は、その德性本然の活動に因る必然の委として、日本民族をして、王道滿洲國承認の形式に於て、誠の道を、全人類に向つて、既に、高く呼びかけしめたのである。日本民族は、誠の道の行者であり、指導者なのだ。然るに、何ぞや、歐米白人は、滿洲國不承認てふ、反逆的態度を示して、自から反省する處を知らず。國際聯盟が、如何なる態度を以て、臨むとも、皇國日本は、東洋の一國として、向前顧みるところ無く、自から進んで、東洋の大局を堅持し、是れが平和保障の責に任じて、以て彼等の蒙を啓かねばならぬ。

見よ、過去一世紀に於て、白人が、敢て、東洋になし來れる、侵掠的歴史の跡を。彼等は、僞瞞外交を弄して、東洋到る處、恣に土地人民を奪取し奴隷としたのではないか！　口に正義人道を說いて、事實、吸血魔的利我に終始し、眩惑せしむるに、物質文明を以てし、威壓するに武力を以てするは、彼等常套の姿であり、態度であつたのだ。

惟ふに、物質文明は、必然の過程として、今や、夫自身、行詰りの悲運に逢着した。これによつて立ち、これを以て、自から誇り來つた彼等歐米文化者流の、受く可き影響の、極めて大であり、寧ろ、致命的であることは、又、當然の數と云へよう。恐らく、將來、彼等は、凡有る方面に於て機會ある毎に、その沒落過程線上に、自から、馬脚を、露すであらう。今次、壽府に於て、ものされつゝある、國際聯盟會議は、その好實例である。

東洋平和の爲めに、また、東洋民族福祉のために、日本は敢然立つて、彼等僞瞞外交の假面を、剝いだのだ。そこに、東洋的精神文化發揚の、チヤンスがあつた。見よ、國際聯盟は、這般その總會に於て、日本の正論を、蹂躙つて迄も、彼等擧つて、勸告案を、可決したではないか。全人類平和のために貢獻すべき筈であるところの聯盟自體の大精神は、一體何處に見らるゝのか。一當事國にのみ、偏した態度、夫で、何が公明正大か、否、尠くとも、東洋平和のためには寧ろ、聯盟は、之を、攪亂するの、機關であつたのだ。惟ふに、聯盟精神たるや、最も神聖なる可きだ、然り而して、此の崇高なる使命を完うするものは、人であり、是を冒瀆する者も、亦、人である、要且つ、人に俟つのみだ。自己の利害にのみ終始して、他を省みざる彼等白人は、誤れる、自負的優越心理に、迷はされて、敢て、橫車を押切つた、これが、聯盟の正體だつたのだ。

勸告案そのものは、一體何を意味するものぞ。

聯盟といふ、機關を利用して、支那を、國際管理下に、彼等が野心を、滿さんとする、是れが歐米白人の、最後の肚ではなかつたか。野心の、憎む可きは、云ふまでもないことだが、又、これに乘る、支那の愚かさ、寧ろ、氣の毒といはふか、また、冷斗惻憶の情禁じ難きものがあるではないか、思ふて、こゝに至る時、吾等東洋民族の、誰か、慄然悲憤せざらんや。

夫れ果して、いつまでも、歐米白人の野望的存在が、永遠に、此世に、可能であり得るだらうか？　また果して、いつまでも、我東洋民族は、彼等のなすが儘の下敷となり終る可きであらうか？　否因果の理法は、全宇宙に嚴存して昧ます可くもないのだ。奮起せよ、全アジヤ民族！　今こそ、東

洋民族復活の、絶好的チヤンスなのだ。天は、自から助くるものを、助く。佛力、何ぞ、正義に、與せざらんや。今こそ、全アジヤ民族の、立つて、一致團結、よく、之に當るの秋なのだ。

東洋の一角に儼然として存在せる、皇道日本は、全民土を賭して、雄々しくも、全白人と、戰つてゐるではないか。全日本民族の義憤、夫れは、偏へに、東洋永遠の、平和保持のためであり、全アジヤ民族救濟以外の、何物でもないのだ。こゝに、皇極理想、王道至上の、大日本精神の、閃きがあるのだ。偏頗、やがて、夫れは、行詰る可き歐米家者流の、唯物文明の、今や孤城落日てふ、理の裁き、また自然の數とも云ふべきか。然りと雖も劍は、病によつて寶匣を出ずとか。斷末魔の彼等を救ひ得るものは、獨り皇極日本精神あるのみだ。日本民族が奮起の原因またこゝにあるを知る可きだ。壽府の世界的檜舞臺に於て、威猛々に脅すに、經濟封鎖、武力壓迫を以てした彼等白人は、正義の行者日本民族が、悲壯なる覺悟を以て、向前、脫退の一路驀進のあとに於いて、果して何が可能であり得たか。

虛僞の假面役者と見物人、彼等は唯一人眞劍の千兩役者がその技、神に入るを覩て、只々呆然自失の態、古禪德が喝破した、妖は德に勝たず、との一語、味ひ得て、妙ではないか。

若し夫れ、眞に東洋精神を理解し、直に、大日本精神に、參ぜんか、こゝに、始めて、全人類の平和に、到達することが出來よう、全アジヤ運動の理想も、指導原理も、こゝに、理解されなければならぬ。そこで、吾人は、更に、皇極日本精神そのものに就て、筆を進めなければならぬであらう。

日本精神の中心思想である處の、皇極の大道とは、我皇室を、中心とする、天地人一體不可分の所謂、神ながらの道である。之を、要約して、君民一體の端的である。勿論、現實的には、君民別に、相對してゐるが、對立中にあつて而も障へらるゝ事なき一如精神本然の姿である。一如は、自己全體が、それに、成り切つた時に於てのみ、味ひ得る、人間至上の妙諦である。自己無き處、自己ならざる無きの妙境である。豈よく我利小見者流の窺及し得る處ならんやだ。

身を殺して仁をなす底、盡忠報國の端的、皆この一如より發する。更に又、眞の國防は、單に、軍備充實のみでは、未だ、眞の目的を達成するとは、云へないであらう。必ずや、そこには、國家經濟の確立と相俟つて、國民思想の統一を條件とする所に、一如思想が、理解されねばならぬ。かくてこそ、軍備をして、眞に力あらしめ、經濟をして、充分價値あらしめるものと信ずるのだ。要

且つ、自己忘却より生れ出づる全靈活動にのみ、吾人が提唱せんとする處の經濟理論が生れるのである。我が東亞大興會が、これに關する卑見を、宣言書二千に載せて、昨秋各方面の首腦者に送つて、以て、甚深の注意喚起に、努めた所以も、亦、こゝにあるのである。眞の一如は、一つの行動が、夫自身、絶對である。從つて、また、これに發してこそ、眞の道德であり、政治であり、教育であり、經濟であり、將又、宗教であり得るのだ。

此眞體は、遠く三千年の昔、既に、三種の御神器によりて示されてある。即ち鏡は、公平無私。玉は、仁德。劍は、一殺多生の、勇斷實行を、表顯して居る。而して、之を行ふには、誠を以てする。誠は、即ち一如精神であつて、天地人に通ずる。又、皇道の皇は、王道の王の字の上に、白を戴く。白は清淨にして、私なきことを意味し、天に通じ、神に通ずる。世の所謂、人道主義とは、全く、其趣を異にするのである。白の字は、日の光に根元して出來、而も萬世一系の、我　天皇陛下御親政たるに於て、意義更に幽玄。御勅語にも、我皇祖皇宗、國を肇むること宏遠に、德を樹つること深厚なり。我臣民、克く忠に、克く孝に、億兆心を一にして、世々厥の美を濟せるは、此我國體の精華、と仰せられて居る。是れ實に學者机上の推論遊戲にあらずして、三千年來實行し來れる絶對無二の典章である。

この精神は、洋の東西を問はず、將又、有色人種なると、白色人種なるとを問ふものではない。將に、全人類が打つて一丸となつて、體得し遵奉すべき、天地間の、大道理なりと、信ずるのである。

× × ×

よもすがら佛の道を求むれば
おのが心に尋れ入りぬる。

昭和維新の大國策と その基礎工作に就て

（昭和十年四月二十五日）

緒論

昭和維新は即ち世界の維新である。少なくとも亞細亞民族の維新であることは、具眼の士の皆ともに痛感してゐる所であつて、最早議論を要せないであらう。

元來我が大和民族は他民族の如く體系としての哲學を弄ばなかつたが、哲學以上の皇道を體得し、之によつて隨時、必要に應じて、光を發揮し來たのである。しかして神武天皇の御詔勅六合を兼ね八紘を掩ふの大理想を扶翼すべく、徐々に實力を培ひ來つたのであるが、今や大飛躍の機に際會したのである。

昭和聖朝の首めに賜つた、御勅語にも、我國の國是は日に進むにあり、日に新にするにあり

と仰せられ、又日新以て更張の期を啓きとある。從つて昭和維新の國策は大乘的邁進であられねばならぬことがわかるであらう。しかしてその大乘的邁進と、我が神ながらの特性たる包擁性を發揮することが所謂我國是であつて、言葉を換へて云へば、即ち一切を包擁して餘さざる底の徹度即ち大乘的精神を以て、各民族をしてその個性天分を十分に發揮せしむると共に、よくその個々の色素を綜合調和して、萬古の錦繡を織出ださしむることである。端的に云ふならば全世界、何れの民族に對しても、齊しく我皇德を光被せしむるの理想を以て、全世界に向つて我が大道德を行ふものであると云ふことを、先づ理解しなければならぬ。

國策の中樞は 皇都の前進である

此れがためには、過去に於ける一過程としての遺物たる模倣乃至老廢機構と觀念上の遊戲とを改めて、皇國本然の姿に還り、飽迄も、想行一致、天地一體、乾坤一如であるところの皇極の大道に立脚して實行しなければならぬ。換言すれば我皇極の大道を完全に把握しなければならぬのである

然して皇道政治、皇道經濟、皇道教育、皇道外交を以つて全世界に臨むべきである。斯く觀じ來る時に、吾人は所謂昭和維新の大國策遂行貫徹の一方策として、先づ皇都の前進を主張せんとするものである。蓋し、大業速進徹底の重點であるからである。然して尚皇都の前進理由としては

（一）皇國日本の重大使命遂行、即ち大亜細亜主義具體化の第一工作として最も有効且適切である（二）我徳川幕府三百年間の鎖國政策に禍された消極退嬰の陋習を改めて、海外進出の意氣と氣魄とを喚起することが出來る（三）軍事上重大なる意義を有つものである、即ち現在の皇都はよし如何に人工的防備を凝すにしても地形から見て防空戰略上不安ならざるを得ない（四）歐米模倣時代の遺物を清算し、皇極の大道に則らんとするには民心を刷新する事が最も肝要である。然して皇都の前進は他の如何なる方法よりも民心刷新の効果が偉大である（五）朝鮮は勿論滿洲その他の民衆をより親しく理解せしめて之が指導啓發の實を擧げることが出來る（六）人口問題は之れにより て自然に解消する。

人口問題は先づ移民と云ふのが從來の考へ方であり又拓務省の腐心する所であるが如此事務的末葉の小手先で解決し得る問題ではない。論より證據、從來拓務省の努力は外國より我國に入り來る數にも對抗し得ないではないか、いはんや年に百萬以上の我國の人口增加を如何にする。已は東都に飽食暖衣して享樂し、事務的申し譯に一寸の懸け聲で本問題を解決しようとするのは、所謂虫がよすぎるのである。その不眞面目さは日本精神と遠ざかること、彼の美濃部の民權自由思想と相距ること五十歩百歩だ。這は紫雲莊の謂ふ大臣病ことなかれ主義の然らしむる所、乃至是れに類する病弊の致す所であらう。要するにこれ等は未だ日本精神の把握ができてゐないからではあるまいか近く現內閣が目論める內閣審議會にしても日本精神の握把ができてない人達を幾ら集めたとて夫では何んにもなるまい。徒らに屋上更に屋を架する從來の拓務省の成績程度に過ぎぬであらう。宜しく我本來の魂に眼醒め、命をかけて範を示すといふ想よりも行を尊ぶ祖先の遺風をこゝに發揮すべきである。之れが爲には、東都における重臣乃至指導階級と稱する者達が前進し。先づ本腰を大陸に据ゑることである。然して一般民衆を大乘的邁進にみちびき、同時に新皇都の附近は大工業地帶化せしめ、然して皇國の武は全世界の武であり、全世界における武の發源地は新皇都の地たらしめて、所謂八紘を掩ふの時、本問題の如きは自ら雲散霧消する。然して各民族はその個性天分を十分に發揮して、眞に和氣藹々の天國をこゝに顯現することができるのである。

（七）皇都の前進を機として一般都市の建造物を不燃燒且文化的ならしむることが出來る。斯く觀ずる時、皇都の前進は即ち昭和維新の根源であり、その國策貫徹に缺ぐべからざる緊急の要事たることがうなづかれるであらう。然も、少くとも新皇都を建設する以上、現代文化の粹を集めて創造的空前の大都市たらしむべく萬事遺憾なきを期して、範を世界萬國に垂れねばならぬ。かうした理由をも含めて、然らば新皇都たるべき地を果して何所に選ぶべきか、少くとも左の條件を具有することが肝要である。

皇都たるべき諸要素と是非の概論及び其歸結

（一）統治上我國有の地たる本島、四國、九州等に何等の不利不便を與へないで、然も新興の大陸に對しても將來進展興隆せしむるに至便でなくてはならぬ（二）對外的關係に於いて可成疑心暗鬼を生ぜしめず且大陸への發展を阻害するが如き結果を招來せしめざる地方なること（三）空襲に對して地上と地下を連絡するに便であり且空襲に困難なる所謂理想的防空都市を自由に建設し得る天惠の地形たること（四）陸海軍によりて完全に防衞し得ること（五）海陸の連絡に至便なること（六）氣候風土から見て、現在の皇都東京に比し、優るとも劣らず且天惠豐かなる地であること（七）經濟的にみて、新皇都創設そのものによりよく數百億圓の巨額を捻出し得て、之を特別會計となし、何等、國庫の負擔を煩はさずして出來得る地方なること。

以上の觀點よりして皇都の前進地點に就て論ぜんに、京都又は福岡といふ遷都論もあり、又京城乃至平壤との論もあるが、京都福岡では眞に皇道主義に基く大亞細亞主義遂行の見地から見て寧ろ姑息であり、且無責任の嫌ひがないでもない。いはんや人口問題の解決をやだ。殊に皇都建設の費用捻出の妙味がなく、又獨立國として生れた滿洲國を、將來どこまでも保證指導すべき任にある我國としては竿頭更に一歩を進むべきではあるまいか。しからば何處に竿頭更に一歩を進むべきか、まさか我が版圖外に持つてゆく譯にもゆくまい。よし遷し得るとしても夫は餘りにも突飛である。そこで結局朝鮮といふことになるが、果して然らば鮮內何れの地を卜すべきか、といふに先づ常識として秋風嶺以北は駄目だと思ふ。前揭第二項乃至第六項に適しないからである。しかしながら朝鮮といへば現狀よりして誰しも直に京城と妄斷したがるであらうから、しばらくその是非に就て檢討することゝす

る。元來京城は皇都たらしむるには土地餘りにも狹隘である。日韓併合の際、なぜ中央都市を平壤にしなかつたかと識者間に論ぜられてゐる程である。平壤は風光明媚、輪廓雄大でその資格京城に優ることは論を俟たないであらう。しかしながら、兩者の比較論はさて措き既に指摘した如く京城、平壤は共に東京より七、八度乃至二十二、三度も寒い。從つてそれだけ自然の惠み薄しと斷ぜざるを得ない、日本人の愛翫する綠樹も花卉も殆んど育たない、耕作も年一回である、いはんや軍港と餘りに遠く離るゝ關係上、皇都としての重要性を缺いでゐる。眼前に天惠豐かなる適切なる場所があるにも拘らず、之を拋擲して北寒荒野の地をこゝろざさんとするは、敢て吾人のとらざる所である。要するに秋風嶺以北は不合格であつて、嶺南にこそ實に好適の地であることを提示せんとするものである。

皇都たるべき最好の適地は嶺南

鑑て考ふるに嶺南の地は前揭の諸條項總ての要素を具有して居るのである。否、研究を重ねるに從つて、益々その好適地たるの確信を强ふするものである。若し夫れ天祖垂訓の御神旨にもとるといふもののあらんか、そも〳〵太古、日韓兩民族は互に隨意居住を求めて、日韓兩地を往來居住せるのみならず、互に祖先をも交換して今日に到つた事實あるを知るのである。なほ、太古に於ける此の兩民族は、我皇室の御遠祖にあらせられる　天之御中主神によりて統治されたことが證明されてゐるのである。その後、高天原の分治國として統治されて居り、恰度その際、天照皇大御神の御神勅に瑞穗の國は我子孫の世々王たるべき地なりと仰せられた。この時の日本は、日本群島の外に朝鮮半島の南部即ち嶺南の地をも含められてゐることが明かにされてゐる（金澤庄三郎博士著日鮮同祖編及び昭和三年四月七日大陸調査會發行阿部辰之助氏著新撰日鮮太古史參照）いはんや御神勅にある瑞穗の國とは、全世界であるといふことは、今や識者の定論となれるに於いておや。これによつてこれを見るに、御神勅に悖るといふ議論は最早無くなるであらう。從つて皇都を朝鮮等へとかいふ偏狹な考へを抱く士も、東洋の盟主大日本であり、世界に向つて皇道精神を宣揚して以て全人類向上のための大導師たるべき理想と實現とに醒むる程の人ならば、必ずや大勢の趣くところ、皇都前進の止むなきを是認し、結局は嶺南を措いて他にないと信ぜらるゝに至るであらう。這は恰も彼の滿洲事變乃至國際聯盟脫退當時における、軍部及右系側以外の一般智識階級を代表せる幣原外

相さへも同感であらう。

即ち彼の滿洲事變を楔機として、立ち上りたる皇軍に對し、一般國民は心から感謝措く能はざる所であるが、事變突發當時閣議の第一聲に於て幣原外相は、關東軍の本庄司令官を速かに軍法會議に引出せと怒鳴つたと謂ふ。これ程恐怖病に罹つて居つた者が、その後覺醒して強く國際聯盟脫退を叫び、當局者を激勵したといふではないか。又近くは、美濃部氏を貴族院議員に推薦した時の政友會內閣に閣僚たりし鈴木、山本の諸氏らも一旦日本精神に眼醒むれば、斷然立つて美濃部氏の機關說と反國體思想を排擊したではないか。そこが眞の日本人であり、日本人の姿である。これを見ても眞の日本精神は偏狹卑窟でないことは勿論、苟くも國の大事に臨んでは、一意　天皇陛下の大御心の下に全生命を捧げることが能くわかる。眞の日本精神は大乘であり、大國民的であり、想よりも行、然も氣魄を尊ぶのであることを知るに十分だ。此れ我國體の精華にして、祖先の遺風を顯彰するものである。更に進んで皇都前進地は嶺南の何地に求む可きや、と云ふことが問題であるが惟ふに吾人は、鎭海軍港用地より二、三十哩乃至四、五十哩の奧地然りと斷ぜんとするものである即ち本會は、慶尙南北道を貫流する洛東江を遠ざからざる所謂邱鎭線の沿線が、その最好適地なることを確信し主張するものである。

全世界に類例なき
鎭海一帶の優秀性

そは鎭海が、我が現在の皇都東京と同緯度にあり、軍港としての諸要素が橫須賀、吳、佐世保等何れよりも勝れてゐる點、然も風光明媚、海陸の連絡關係上遙かに東京を凌駕し、殊に地震の絕無なること及び若し一朝○國と戰端を開始した場合等を豫想するも、防海防空上の不安なきこと等、幾多の好條件を具備せる點に想ひを寄する時、蓋し皇國日本の天祐であることを痛感せしめらるゝのである。

鎭海は實に世界無二、稀に見る天與の良軍港用地であつて、灣內は世界の全艦隊を容れて猶ほ餘りあるといふ程の大港である。彼の三萬噸級の軍艦と雖も、何等の施設を要せずして陸上と自由に話を交へ得る程の天惠を有し、然もその上空には絕へず特殊の氣流があつて、この氣流不案內の飛行機は飛來することを得ず、若し來らんか、必ず墜落の悲運に終るの外無しといつた特異的條件を

有するのである。又その左側に横はる行巖灣は釜山港に十倍し、且之は鎭海灣も同樣であるが假に關釜關絡船が風波のため入港不能の場合と雖も極めて小波に過ぎず。從つて碇泊中の船舶は絶對に安全である。故に獨り貨物の呑吐港といふ點のみから見ても實に理想的な要素を具備するのである且又無數の島嶼を隔て玄海と對州を望む處、その風光の明媚にして雄大なる眞に彼の金剛山と共に新興大日本帝國の誇りであらう。續いて馬山であるが、海深くして恰も湖水の如く、靜寂にして幽邃、避寒と避暑、靜養その他別莊地としても實に絶好の仙境である。しかして馬山より大邱に至る沿線即ち邱鎭線の沿道は起伏波狀を呈するも多くは平坦にして汽車、電車その他交通施設を行はんとするもトンネルを要せず、堰劃程度で濟むといふ地の利を占むる所、その利用の妙味また盡きないものがある。三陟の無煙塊炭は平壤の粉炭に勝り、陜川、洛東江、南江その他を利用せんか、水力電氣は自由に企業し得るのである。なほ近くは此地方に總督府の肝入りで一大電力株式會社が成立せんとしてゐる。これらに關しては筆者等已に明治四十二年渡鮮以來、親しく研究踏査したる結果を述べるのであつて、誠に天惠の富裕なる實に驚嘆そのものである。思ふて玆に至るの時、我皇國の前途には瑞光燦として輝けるを痛感するのである。

建都の工作豫定區域の

土地賣買禁止

皇都新設に好都合は馬、鎭一帶殆ど國有

大皇都建設の第一工作としては、先づ之に必要なる豫定區域一帶に關する限り、一定期間、土地の賣買を禁止すべきである。夫は恰も滿洲國が新京に新國都建設に際して採つた方策と同一である然してその採れる工作過程を比較するに、彼の北滿の高原地帶と温暖且風光明媚な嶺南地帶とは、効果の大小その他に於いて雲泥の相違、實に雪上更に霜を加ふるの妙味があらう。更に皇都新設に就て好都合であることは鎭海、馬山一帶の土地が殆んど國有であることである。これは實に先輩の卓見と深慮の致す所であつて、この點吾人の深く感謝する所である。その他の土地に對しては特別の機關を設けて之を特別會計とし、一般所要の土地（商工地及住宅地を含む）を總括的に收用してその面積は少くとも百萬町歩以上を必要とするであらう。次にその收用價格の點であるが、坪當り

平均六十錢內外とすれば先づ適當であらう。即ち現在の相場は坪當り平均田八十錢弱、畑六十錢弱林野三十錢弱とみて、地主には何等の苦痛を與へず、且つ收用上の無理もなく又困難もないといふことが首肯されるであらう。

而して今假りに收用面積を百萬町歩とするならば、その收用總費用十八億圓となる。この百萬町歩の約半分五十萬町歩を官用その他一般公用地とし、殘り五十萬町歩を以つて一般に拂下げ或は又財源とする（本春意見發表の時より地價漸騰につき訂正）第一期の拂下げを假りにその一割即ち五萬町歩とする、これを坪當り金約十圓から五百圓と見て平均五十圓とせんか、その收入額は實に七十五億圓となる、これを以て土地全體の收用費十八億圓を償却せば殘額五十七億五千萬圓となる、この一半即ち二十八億五千萬圓を以て東都に於ける救濟と更生援助の費用に充て、殘りの二十八億五千萬圓を以て新皇都を計畫せばその大體の輪廓が成立するであらう。

國策遂行の巨人は誰ぞ

皇國日本の將來は輝く

結論

第二期の拂下げ期間に入れば種々の段階と方策とを要するであらうが、今假りに十五萬町歩として前回と同樣の評價平均坪當り五十圓とせんに、その收入額は實に二百二十五億圓となる。此金額を以つてすれば、官公建造物の大體は整ふであらう。同時にまた關釜間の海底トンネルも容易に出來得るであらう（その費用は約七億圓？）然もなほ三十萬町歩の理想的市街地を保留することゝなる、これを前例同樣の價格とするも尙四百五十億圓となる。これを以て大工業都市の建設その他凡有る文化施設をなすの資源となさば、恐らく世界に誇るに足る新皇都の偉容を完備することが出來よう。斯くして皇都進出斷行の曉には人口問題は自然に解決し、軍事上の不安を一掃して國民の自覺に出づる眞の日本文化を創造し得るの動因となり、民心を眞に新たならしめ以て皇道主義を世界に布き得べき一大轉機たらしむることを得よう。況んや大亞細亞主義てふ大理想實現化をやだ。昭

和維新の興國日本の將來を思ふ時、洋々として欣快惜く能はざるものがあるではないか。更にこれを楔機として第二、第三の獨立國が滿洲の外に出現して、皇道旗下に馳せ來らんか最早我國は名實共に英、米に代りて全世界を指導し、對立的氣分は總て一掃し盡して、全世界に全體一如の皇風を光被せしめ以つて大慈悲の大誓願を成就し得るに到るであらう。然して皇國の武は全世界の武となりたる時、全世界は一樣に所謂樂土境化するに至るであらう。そも遷都に基く大國歩を進むるものは何人？……金も要らず、名も要らず、命も要らないといふ巨人こそ此の國策を遂行し、皇國日本の柱たるべき重鎭である。昭和維新の大閣秀吉は何人か？。勝、山岡、高杉、中岡、坂本、西鄕、大久保乃至木戸、山縣、伊藤、井上たるべき偉人は誰ぞ。今や六合を兼ね八紘を掩ふの大理想扶翼に向つて、一大飛躍をなすべき千載一遇の好機は到來したのである。今にして此の好機を逸せんか大和民族發展のチャンスは永久に失はれんとするのである。噫！

時局感想（昭和十三年一月二十二日記）

東亞大興會代表　大橋笑雲

一、近衛內閣の重大聲明（今月十六日）這は國民の總てがヨリ一層强硬に、積極的態度であれと期待して居ただけに、所謂聲明に對しては寧ろ微溫的であり、物足らなさを感ずる程である。乍併、可成磨擦を避けて擧國一致の體制の下に、皇運を扶翼し奉らんとする近衛首相の建前より見れば、時局に對して眞に目醒めざる老朽者を抱擁網羅して、克く之と提携し行かんとする大乘的眞意を察する時、寧ろ穩健且つ適切な處置と悅ばざるを得ないのである。

然し乍ら彼等老朽者流が國民的期待に對して、果して副ひ得るや否やは大いに注意すべき命題であらう。否寧ろ百年河淸を俟つに等しいと云ふても過言ではあるまい。

思ふに、彼等は過去歐米追從時代の殘骸であつて、寧ろ我日本精神を毒する場合が多いやうである。それは歐米の個人主義的自由思想の憐む可き中毒患者だからである。故に彼等中毒患者には

日本精神を云爲するの資格無く、從つて國策斷行に關する限り、一切發言容喙の道を塞いで然る可しと信ずるのである。斯くすることが彼等に對する眞の慈悲であり、現下の非常時突破に推進力を加へしむる所以であるからだ。

近衞內閣は今後宜しく眞個の日本精神に則り、大乘的氣魄に燃へて、飽くまで我傳統的獨自性と自由性を遺憾なく發揮して、國策遂行を完からしめ、以て國民の總意に酬ゆる所あらんことを期待して止まないのである。

二、對支問題乃至非常時克服の根源は、飽くまで眞箇日本精神の把握と皇極の大道をして、國民のすべてに徹底せしむる事がその第一要件である、之にして缺ぐるところあらんか所謂佛作つて魂入れずに終るからだ。

最近顯はれたる諸問題にしろ、その動向の凡てが小乘的に墮して、我日本精神の眞髓たる大乘的妙味に觸れてゐないからである。

我東亞大興會の起つ所以もこゝにあるのである。

(イ) 滿洲重工業開發會社（滿洲國と日產の協力會社）これは滿洲國現地に於て、豐富なる原料と安い動力乃至勞力を得、而して猶ほ且つ手近に需用地をも控へて居る點に想到する時、實に四拍子揃ふた近來稀れなる好事業である。

乍併、飜つて此種の日本內地の事業は如何にするか、或はその從業員を如何にするかは、見逃すことの出來ない一の大問題である。是を從來の例に徵するも、日本人は單に監督者乃至模範職工として、百分ノ二、三に過ぎず、然も滿人職工の熟錬するに從ひ、日本人は經濟的に太刀打ちが出來ず、漸次減少するのが既存の事實であり、歐米經濟學の歸結である。果して然らば如斯は既に手後れで、輕工業に就ても亦同樣である。

(ロ) 北支に於ては先づ戰後の住民を救濟し、日本こそは吾が救濟主であると彼等北支民衆をして肯かしむる樣に、實物敎育をするのが最も必要である。這は獨り本會のみの云ふ所でなく一般の齊しく唱ふる處であつて譬へば黃河の治水工事の如きは曠古の偉業たる可く、之が遂行完成は日本を措いて誰に求む可きか、その前途多事なるを思ふ時、一段と小乘に墮してはならぬと痛感する次第である。（小乘とは先づ自分等が悟り自分等の利益を圖る）

若し此偉業にして完成されんか、現在に於てきへ支那に於ける米一石の生產原價は金拾五圓以內

のものが恐らくはそれ以下で以てヨリ優秀なものが生産し得らるゝであろう、勿論諸文化の向上につれて物價が高上するとは云へ。

然らば日本内地に於ける多數の農村は如何にならうか。内を忘れて外。之は日本人の美點であると同時に又欠點でもある。此意味に於て一面又日本人は虚榮心、功名心が強いとも云へよう。

（八）蔣介石は勿論、英佛米共に日本はやがて財政的に行詰りを生じ、倒るゝであろうことを妄信し、期待して居る樣であるが、這は固より先方に於ける錯誤もあり、認識不足もあるであろうが、我當局者は他山の石として深く脚下を照顧すべきである。

三、この際無駄と見榮は絶對禁物である。言ふまでも無く、恐らく我子の危急存亡を救はんとする場合、無駄や見榮でもあるまいから。

支那民衆の生命財産の保護を行ぜんとする場合、特に之を痛感せざるを得ないのである。

附錄

滿洲國と日本（昭和七年九月二十三日）

東亞大興會代表　大橋吹雲

滿洲國の承認は、日本民族が其精神たる皇極の大道を世界に宣揚する初一歩、換言すれば誠の道を世界に呼びかくる產聲として取扱ふべきものであらう。

皇極の大道とは、我皇室を中心とする天地人一體不可分の所謂神ながらの道である。約言すれば君民一體の端的である。勿論現實的には君民別に相對してゐるが、相對中にありながら然も遮らることなき一如精神本然の姿である。一如は自己全體がそれに成り切つた時に於てのみ味ひ得る人間至上の妙諦である。

これを佛教の言葉で宗教的に現はせば佛凡一體、思想的には生佛一如である。更に此の道をメーソン氏の言葉で云へば印度の精神主義、支那の審美主義、歐米の功利主義等を打つて一丸とした萬法抱擁底の大乘的精神である。勅語に之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らずとあるは此間

の消息を宣らせ玉ふたのである。明治天皇が御製に、「罪あらばわれをとがめよ天つ神、民は我身の生し子なれば」と詠じさせ玉ふた處、自己忘却底の大み心が偲ばれて畏れ多い極みではないか。松平定信が老中を拜命するや、誓ひ書を自己の信ずる佛陀に捧げ、自己に不正あらばその生命を奪はれんことを求めたのも此精神の發露である。故に世界何れの民族と雖も直ちに此の道に歸入して、よりよき安住の地を得てよく其性能を發揮し、天職を全ふし得る。蓋し最上乘の至道であることを確信して止まないのである。

此眞髓は遠く三千年の昔既に三種の御神器によりて示されてある。即ち鏡は公平無私、玉は仁德劍は一殺多生の勇斷を表顯して居る。而して之を行ふには誠を以てする。誠即ち一如精神であつて天地人に通ずる。又皇道の皇は王道の王の字の上に白を戴く、白は清淨にして私なきことを意味し天に通じ神に通ず。世の所謂人道主義とは全く其類を異にするのである。白の字が日の光りに根元し而も萬世一系の我　天皇陛下御親政たるに於て意義更に幽玄、御勅語にも我皇祖皇宗國を肇むることは宏遠に德を樹つること深厚なり、我臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして、世々厥の美を濟せるは此れ我國の精華なり、と仰せられて居る。是れ實に學者机上の推論遊戲にあらずして、三千年來實行し來れる絶對無二の典章である。

王道政治を行はんとする滿洲國に對して、皇國日本は敢然として先づ之が承認を斷行し、攻守同盟に於て合體したのである。吾等の進むべき指導原理はどこまでも一如精神に立脚し、我が神ながらの道を鐵則にしつかりと足取り强く、飽くまでも責任を負ふの覺悟と意氣とを披瀝し、以て各自が特長を發揮し盡すことである、故に飽くまで近視的小我小見があつてはならない。即ち萬法を抱擁して餘さざる底の大乘的襟度を持してこそ、各民族の個性天分てふ箇々の色素よく萬古の錦繡を織出すことが出來、こゝに始めて眞の樂土鄕建設の實を擧げ得るのである。

對策

一、滿洲中央銀行の創設

目下存立の資本金三千萬圓の中央銀行、這は過度的事業の一階梯に過ぎざる可く、速に滿洲國民をうつて一丸とした全國民を株主とする資本金は少なくも五億圓以上のものを創設せざる可らず。滿洲國三千萬の民衆中、滿洲國中央銀行株引受能力を有するもの約二割と見るも六百萬人、一株

の金額を百圓とするも六億の資本金となる。此の株式は數人して一株を共有するもよく又一人で數十、數百千の株式を引受くるもよし。而して之が株式拂込みに付き現金を有せざるものには朝鮮銀行より融通の途を開いて遣ればよい、其見返り擔保としては其株主の有する有形、無形の總財産につき抵當權又は質權を設定せしめて置けばよい。猶ほ其株券をも見返りとして保管し置くことゝすれば朝鮮銀行に損害の來る虞れは無い、又朝鮮銀行は之が貸出しのための兌換券發行も大した增額となるまい、何となれば株式拂込の爲め一旦貸出した鮮銀紙幣は、直ちに滿洲國中央銀行創立事務代表者の名義を以て、朝鮮銀行に預金さるゝに到るからである。斯くして成立したる滿洲國中央銀行は基礎眞に大盤石、金融は勿論、各種の社會政策に又調節に、圓滿無碍の妙味を發揮し得て、所謂眞箇の樂土鄉は常恒不變のものとして、幾久しく繁榮するに到るであらう。

ソビエート、ロシヤ產業五ケ年計畫、スターリン株式に比し穩健着實なると其運用に妙味あるは天地雲泥の差ある可く、滿洲國を眞箇の樂土鄉とするには此の眞土臺たる而も此の簡單なる施設を以て始めとするのである。

二、移民問題

此儘で推移せんか日本より滿洲國に入るものよりも、滿洲より日本內地に移住するものが數倍、若しくは數十百倍に達し、更に新入、各民族の比例を見るに、日人一に對して恐らく漢人は數十百倍に達するであらう。這は過去現在の內鮮滿の實際的移住狀態に徵して明な事實である。滿州國の興隆發展には單に創業の際日人を要するのみならず、其維持と開發にも亦不可分の天職を背負ふものであらう。而も日人の經濟思想は眞に單純なもので、現に移民に乘り出しながらも、衆目環視の中で進退兩難に陷りつゝあるではないか。近くは彼の星櫻團の北滿移民、東大營の乃木村の如き皆然らざるはない。故に爲政家たる者は猛省一番、爰に留意すべきである。

滿蒙の地は彼のブラジルや米國と異なり、人蹟未到の地は殆んど無い。曾ては世界を征服したるジンギスカンも、清朝の祖先も將又朝鮮李朝の祖先も、皆此處より出でたるものである。而して人民は全世界に類ひ稀れなる勤勞の民である、而も信仰の中心は、皆財に關する神と徹底し切つた私經濟の勇者である。

よろしく荒削りは土民に、仕上げは日人にと云ふ方策を樹立することが肝要であろう。而も之を經濟的に少しの無理も無く穩健着實に進行せんとするには、國有地又は逆産地の外に今直に滿鐵、東亞勸業、東拓等の如き團體をして、時價で既墾地を集團的に買收せしむる事である。幸ひ支那殊に滿洲の地は馬賊匪賊軍閥の横行と、苛斂誅求から土地の價が低廉で目下の價は恐らく事變前よりも低價である。此低廉な機會を逸せず買收し、然る後匪賊馬賊等を討伐し秩序維持と同時に所有權の手續法を制定確保し、道路鐵道其他文明の施設を加ふる時、地價は數十倍に騰貴し、移民は招かずとも水の低きにつくが如く來り集まる事火を見るよりも瞭である。約言すれば移民用土地の收用と馬賊の討伐とは一體不可分である。移民用の土地を考慮せずして單に馬賊のみを討伐せんか移民問題は最早破壞されたるものと見て差支へあるまい。移民に成功すると否とは以上の要點に止まり他は枝葉の問題である。枝葉問題のみに拘泥したり又土人が振向きもしない未墾地に着手したことが移民失敗の原因であろう。又日人の多くは軍隊、鐵道沿線、港灣、大工業地域に關聯してのみ存在し得る事も考慮して置かなければならぬ。同時に滿蒙の地域だけでは我人口問題を解決し得ざる事をも銘記し置くの要があろう。尙給料取のみが移民問題を取扱ひ從つて月給取のみ存在する從來の

やり口は此際斷然改めなければならぬ。機械耕作、這は温帶又は熱帶地方で而も勞銀の高い所で採用する耕作方法である。寒帶地方は結氷解氷のために自ら風化作用を受け、深く耕すの要はない。而も解氷直後は車輪土に埋りて暫らく其活動を妨げられ而も此時既に播種の最好期節到來し居る事も考慮中に容れなければならぬ。机上の學問のみでは實用の力を得るものでなく、力は體得底の人のみが占有する特權である。即ち眞箇の苦勞人にして初めて了得する賜ものである。よし最も適切なる政策が樹立されたとしても其實行は直に期待し得るものではない。必ずや宇宙眞理の體得者たるのみならず企業經濟に老熟せる巨人を以てするに非らざれば、我國現在の行詰り打開と其功果は期し得らるべきものではない。從て今後は官吏の採用規則をも改めることが最も緊要となろう。

以上により移民用土地が決定したならば移民其ものは急ぐことはあるまい。寧ろ數年後に到りおもむろに進行を圖ることが穩健適切なやり方であろう。勞して効なき輕佻浮薄、申譯的移民の枝葉事務を排し極めて地味に、詳言すれば移住の際、旗や徽章を殊更に標示して徒らに土民の感情を刺戟するが如き態度は差控へ、寧ろ深く實を培ふことに專心努力して、移民は自然に志願者中より撰拔し土買地收其他之に關する費用を負擔せしめて奬勵指導せんか結局國庫の負擔を要せずして移民

事業は達成され、移民其のものゝ基礎また自ら鞏固となるであろう。

三、軍費其他滿洲國のために要する費用

這は速に滿洲國が支弁することが當然であり、日本また遠慮なく之を受けることが協力一體の親しみを增す所以ともなり、佛法で云ふ布施の精神、相互の報謝、感恩の意義ともなるであらう。

四、日滿兩國の經濟統制に付て

石炭、鐵、硫安、鹽、木材、小麥其他滿洲國に於ける重要産業と內地産業との統制調和を圖ることも一方策であらう。乍併這は消極的であり一時的彌縫策であつて、過度時代の一階梯に過ぎないことを忘れてはならない。

五、金に膠着せぬこと

現代人は餘りに金に執着が過ぎる、殊にブロック經濟が叫ばれて居る今日、大に反省するの要があろう。

滿洲國で要する資金は、滿洲自體の資源によつて工夫し、案出すべく助成する事が大切である。徒らに日本より資金を投ずる事は勞して効なく、這は恰も施肥が度を過して實らざる作物にも等しいであろう。

二宮尊德翁は宇津家復興に就て、領主大久保加賀守に對し、私はお上から一文の金も頂かぬ……今日まで宇津家復興の思召あつて、しかもその實少しもあがらぬのは、正しく莫大の費用を御下げ渡しのためかと存じます。又恐れながら御前、わが日本六十餘州、西は長崎から北は松前の端々まで、良田、良野、何萬億町とございますこの莫大の良田を未だ異國から金子を借りて拓いたとはきいてをりませぬ、と答へたではないか。我神武天皇、我國をお拓きになされた時、金子を御持ちになつて居つたか。自力更生の叫ばるゝ今日、識者は深く思ひを玆に留むべきであろう。假令一時應急の支出を要するとするも、這は他日眞の義務者が成長したる時に負擔せしむべく今より培ふことが大切である。從つて項目第一に提案せる滿洲中央銀行五億の資本を利用することも一方策であり、同時に各種各方面に亘つて工夫することがヨリ肝要である。

滿洲國內に於ける我國產品の輸出狀況は、今や治んど獨占に近く、旺盛なるこの事實を如何に見る?!!若し夫れ沿海州に、南支に、將又印度地方に於ても、眞に我が誠の道を謳歌して飜然我に歸入するの日あらんか、問題は疾風迅雷、立所に解決されて金の溢れる時代が來よう。(完)

昭和十三年七月十日印刷
昭和十三年七月十五日發行　（非賣品）

著作兼發行者　大橋笑雲
大邱府上町五十四番地

發行所　東亞大興會代表

印刷者　鏑木軍三
大邱府上町五十四番地

印刷所　大邱印刷合資會社

大邱府南龍岡町五六ノ一
發行所　東亞大興會